

2025年6月2日（日）円山教会集会祭儀

マルコによる福音書 14・12-16、22-26

除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

ご聖体の祝日おめでとうございます。聖心の学校はそれぞれ保護の聖人に捧げられており、札幌聖心はご聖体に捧げられています。今日は、札幌聖心最後のご聖体の祝日ということで、特別に感慨深く、そのためというわけではありませんが、集会祭儀ということを失念しておりました。さきほどわかりましたので、原稿がなく、あわてて一部、携帯電話に打ち込む始末で、ベトナム語もないのでお許しください。

さて中世のヨーロッパでは、この日はコーポス・クリスティ（Corpus Christi）と呼ぶ大祝日でした。イギリスでは、日常の中で、キリスト者として生きる助けとなる聖史劇（聖書の物語）や道徳劇（悪徳を避けて美德を選ぶ）が様々な職業のグループによって演じられ、のちのシェイクスピアの劇はそこから生まれたそうです。当時の欽定訳聖書（King James Version）の言葉を読むと、響きやリズムがシェイクスピアとつながるように感じられます。

40年以上前、フィレンツェのドゥオモと呼ぶ大聖堂で、この祝日のごミサに与かった時、パン屋組合など、色々な職業の組合の人たちが、京都の葵祭のように、中世の服装をしてそれぞれの旗をもってイタリア語で「主よ」と唱えながら入場してくるのを見て、それぞれの時代の人たちが皆、日常にキリスト者として生きるために、典礼においても努力し、工夫を重ねていたのだと実感しました。

考えてみれば、2000年前にイエスが、あの最後の晩餐で差し出してくださった御体と御血、そのいのちが、今も私たちに届くということはほんとうに奇跡です。愛は奇跡を起こすといわれます。神は愛そのものですが、愛は分かち合いであり、その神から遣わされたイエスは、父の想いをいつも私たちに届けてくださいます。その想いとは、愛の中に生き

ること、分かち合いの中に生きること、そして、和解して生きること。(この「和解する」というのは避けたいと思うことがありますね。でもイエス様が御血を最後の一滴までおさげして和解の捧げものとされたので、和解するより道はありませんね。)

私は、十字架上のイエスの「エリ、エリ、レマサバクターニ」(「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」)という叫びを想うと涙が出るのですが、イエス様がご自分にとって、命よりも大切な御父とのかかわりの実感すら一時的に捧げてくださってまで、私たちに贈ってくださったかかわりを生きるためには、個人ではなくイエスのからだとなる共同体を生きることが必要だと感じています。

それは上下も年齢も国籍も職業も何も関係ない、イエスに目を注ぎ、その命で養われる共同体です。私たちが和解するためにイエスが流されたその血で浄められ、和解する共同体です。ミサや集会祭儀、そして分かち合いによってこのような共同体は育ち、日常の中にイエスの命が私たち弱さや欠点にも関わらず輝くのでしょう。

御父とイエスの想いを味わい、分かち合い、和解して共同体となっていきましょう。

ありがとうございました。Cảm ơn bạn